

“ブーム”の中で……

各 位

野 田 一 夫

小生は好奇心旺盛でかつ人間好きをためにいろいろな会に入っていますが、それらの中で最も気にはいっているもののひとつに「オーストリアのワインと文化を愛する会」があります。

『会議は踊る』でその名も懐しいメッテルニヒ侯爵が会長ですが、日本代表は敬愛する先輩鳥井道夫氏、構成メンバーもよく企画も凝っているので、数ヶ月ごとの会合がたのしみです。

27日に開かれた11月例会では、今年収穫されたブドウでつくられたワインの新酒（ウィーンでは“ホイリガー”とよばれています）の味を良き仲間と賞でながら、わが国が生んだ世界的オペラ歌手白石敬子さんのオーストリア歌曲に酔いしました。帰路、夜寒の大気をむしろ快よく肌に感じながら、2週間前日本全体を巻き込んだかの如きあの常軌を逸した“ボージョレー・ヌーポー”騒ぎのことを想い起し、「酒は静かに飲むべかりけり」（若山牧水）と思わず口ずさんでしまいました。

あの騒ぎに典型的にみられるように、われわれ日本人の外国文化・文物の摂取の仕方にはとくに偏りがあり、かつ“ブーム”と称する熱狂劇がつきものようです。“ホイリガー”には全然無関心な人々でも、今やウィーンといえば必ず眼の色が変わります。池袋のセゾン美術館では「ウィーン世紀末—クリムト、シーレとその時代」が12月5日で幕を閉じますが、今月は佐藤明氏の写真展「ウィーン幻想」が銀座のエスパース・ブランタンで、オペレッタ「ウィーン物語」の公演が日暮里のサンホールでと、ゴームはまだ続きそうです。

教育方針のひとつの柱を“国際性”に置いている多摩大学としては、「新酒といえば“ボージョレー・ヌーポー”，オーストリアといえば“世紀末のウィーン”」といったブームには動かされにくく、しかも海外諸国に対し広い視野と深い見識を備えた人材をぞくぞく輩出したいものです。

ことばの重み

各 位

野 田 一 夫

今週見たテレビ番組の中で最も印象に残ったのは、劇作家原千代海氏のお話し（NHK総合「日曜インタビュー」）でした。同氏は現在82歳ですが、このほどイプセンの全作品をわが国ではじめて原語であるノルウェー語から訳出するという大仕事を完了されました。訳業は未来社より『イプセン戯曲全集』（全5巻）としてすでに4巻刊行されています。

原氏は何と還暦を過ぎてからノルウェー語の勉強に志し、ノルウェー語でイプセンを読んでみて、これまで日本に紹介されたイプセンの作品が誤りに満ち、またイプセンの真意をまげて伝えていることを始めて知ったとのこと、実にショックでした。私たちが若い頃感激して接したイプセンの作品（本であれ舞台であれ）がイプセンの本質から遠く離れていたとなると、これはやはり考えさせられてしまいませんか。

かといって原氏の語り口には『もうひとつの万葉集』や『欠陥英和辞典の研究』の著者のように既成の権威に挑戦するといったツッパリは全然感じられません。「岸田國士先生の弟子の中で田中千禾夫さんとか内村直也さんが次々に立派な仕事をしていくのに、私はこれといった作品もなかったことを久しく苦にしてきました……」という卒直謙虚な言い方が原氏の人柄を端的に示していましたが、他方「戯曲を“台本”などと呼ぶのは嘆かわしい。イプセンも岸田先生もことばを殊のほか大切にしていたのに、最近の俳優は“動き”のみを追って、“ことば”を忘れてしまった……」と厳しいご指摘もありました。

因みに、多摩大学はわが国の大学ではじめて、一般教育の中で“話し方”（国語Ⅰ），“書き方”（国語Ⅱ）を必須科目とし、「音楽表現」，「絵画表現」および「演技表現」を選択科目にしています。社会人として“表現”とくに言語表現がいかに重要かを、私共は十二分に認識しているつもりです。

“麦畑”現象

各 位

野 田 一 夫

早や師走も半ばを過ぎ、いつしか年の瀬。年の瀬といえば忘年会、忘年会といえば、当節は好むと好まさるにかかるわらずカラオケ、そしてカラオケといえば、今年のヒット曲の極めつけは「麦畑」だといわれています。何しろ作詞・作曲は榎戸若子なる全くの無名人である上に、レコード会社4社からほとんど相前後して発売された作品の中には、わざと歌手の名をふせたものがあったりしたことでも話題を呼び、発売ソフト(CD, テープ, レコード)の数は50万枚に達する勢いです。

歌詞は、農村に住む若い男女の健康にして素朴な求愛のやりとり、オリジナルは東北弁ですが博多弁、名古屋弁等のヴァージョンもつくられており、デュエットをより楽しませます。曲は誠に軽快で歯切れのよいリズムで終始し、キーをGマイナーハイ落とせば、誰でもすぐ歌えます。この田舎のにおいのブンブンする歌が、六本木や新宿や渋谷で、しかも学生達にまで圧倒的に人気を拍しているのはどうしてでしょうか。単に“おもしろみ”とか“場うけ”からくる年末の一過性現象なのかもしれませんのが、何となく、もっともらしいリクツもつけてみたい気がします。たとえば次のような……。

経済の高度成長のあとに思いもかけぬ“円高”効果が重なって、日本人は気がついたら世界一の金持ちになっていました。カネに多少の余裕ができるのでやれ外食、やれ買物、やれ旅行、やれスポーツとここ数年“豊かさ”を猛烈に求めてみたのですが、結局この国の大衆に貧しい社会資本と物価高のもとでは豊かさの“実感”に酔いしれるなどということは到底不可能だと、“孤独な大衆”はやっと気づき始めたようです。大都会の虚飾の中にあって空ろになり勝ちを心の底に蘇ってきた“素朴で暖かみに充ちた生活”への願望、「麦畑」の人気は正にこの願望に支えられているといえませんか。

各 位

驚いたことに U F O が……

野 田 一 夫

久方ぶりに横尾忠則さんが「新作版画展」を開きました。彼は感性・技術・言語表現力の3つの才を兼ね備えた希有な芸術家で、私が将来多摩大学の「絵画表現論」の講師にとひそかに狙っている1人です。十年以上昔、彼を私に紹介してくれた阿久悠さんが、例のキマジメな顔で私の耳もとにこう囁いたことを、今も懐しく憶えています。「……彼がUFOに凝っていることはご存知でしょうか、『UFOって本当に存在するんですか』といった質問をすると、彼はピィと席をたってしまいますから注意して下さいね……！」と。

その後横尾さんとひどく親しくなって 遂には2人で「ピカソ展」を観にニューヨークに旅までしましたが、阿久さんの注意がきいてか私はこれまで、横尾さんからUFO論を思う存分聞き出しません。そこで今後にそなえてUFOの勉強をしておこうと、個展をみたあと「八重洲ブックセンター」へ立寄ってみました。ひょっとすると横尾さんのUFOの本でもあるのかと思っていたのです。が、いや驚きました。折からUFOのブックフェアが開催されており、何と書棚に所狭しと並べられた50冊を超す本の前に、大勢の人がたかっていたからです。

私の知らない間にわが国では、UFOに関してはかくもあらゆる情報、分析、推理……が本となって出版されていたのです。科学技術の成果がわれわれの日常生活のすみずみまでを潤おしている現代では、人々の好奇心を心底からそそる謎とか未知の世界はほとんど姿を消してしまったのに、人々の心は一向に安らかにはならないとみて、予言とか靈界とか超能力……に関する本も静かにブームを呼んでいるようです。ただ愉快なことに、UFOだけはさすがに「自然科学書」のフロアで取扱われています。横尾さんはきっと当然という顔をするでしょうが。

“利休の年”逝く

各 位

野 田 一 夫

恐らく人には誰でも、その人にとて最も興味をもちつづける歴史上の人物があると思います。私にとって、そういういた人物の一人は千利休です。彼と私とは、性格、人生観、生きた時代の環境……等々すべて似ていませんが、ひとつだけ似ている点があります。それは、選んだ職業（彼にとって茶道、私にとって学問）の分野の伝統的権威に強く疑問を感じ、進んで時代の要請にふさわしい新しい道を模索したことだと思います。

ところで何かにつけてこの国では、そうした人間に対して周辺がかける社会的圧力の陰湿さ（嫉妬、中傷、謀略……）は、昔も今もほとんど違っていないように思えます。利休は結局その犠牲となって苦しみ、最後には切腹して果てたわけです。もとより私は私自身の才能なり実績なりを利休のそれと比較しようなどという滅相なことを考えているわけではありませんが、それでも、これまでいろいろな事を創めた際の鬱陶しさやしんどさは相当なものでした。

さて、今年は利休の当り年、書店には各種の利休ものがわんまと並び、何と映画界では、利休を描いた作品が2本も公開されました。私は2本とも観賞しましたが、利久と彼をとりまく人々の描き方は異なれ何れも彼の死のナゾに焦点を当てており、利休の無言の死が社会の陰湿さに対する抗議であったことを示唆してくれます。異常な好景気と異常な事件が錯綜する世紀末を迎えて、われわれの多くは多分未来に対し期待よりは不安の念を潜在的に抱いており、それが自然に利久の生きざまに対する関心を呼びおこしたに違いありません。大いなる“国際化”を目指す日本の社会で、新世紀に向ってこの伝統的陰湿さが今後少しづつでも払拭されていくことを信じます。

来年が皆々様にとってよい年でありますように。

新年は「卒業」から

各 位

野 田 一 夫

明けましておめでとうございます。

多摩大学にとっては、始めての新年ですが、開学後9カ月をふり返ると、全てが順調に推移し、新設大学としてはそれなりに評価も知名度も高まってきたことを喜んでおります。「小さい大学大きい理想」をキャッチフレーズに発足した多摩大学の評価と知名度を支えていくものは、まず優秀な教職員、ついで個性的教科内容、第3に充実した設備です。実はこれら3つの実現は、多摩大学が時代の要請に応えて、大学の活動を広く社会に開放することを意図した結果です。ただし初年度は開学直後の忙しさで、大学の開放はほとんど実行に移されませんでした。したがって今年度の多摩大学の課題は、倍増する学生に対する正規の教育の拡充と大学の開放です。大学の開放には継続的事業としては大別して、社会人向け講座と施設（アリーナ、図書館、食堂等）の利用制度が考えられますぐ、それら以外でも本学は、所期の理念にかなうかぎりあらゆる機会を捉えて“大学開放”に心掛けていきたいと思っています。

たとえば、来週（12日）金曜日の午後9時から、TBS系の連続テレビドラマ「卒業」が3カ月間にわたって毎週放送されます、その舞台は多摩大学です。人気女優中山美穂が主演する“学園もの”だけに放送会社がとくに力を入れている番組ですが、関係者がいろいろな大学を物色したあげく多摩大学に白羽の矢が当ってご依頼があり、私どもは番組の内容をよく承って応諾したものです。ただし多摩大学の姿は架空の女子短大として画面に現われますし、脚本を読むと毎回大学以外での場面が過半を占めています。しかし、とにかく「協力 多摩大学」の名で本学の建物やいろいろな施設が毎週全国に紹介されるのは、實に喜ばしいことだと考えております。

各 位

K A S T の誕生

中 村 秀一郎

日本の大学改革は実行の時代に入っています。わが多摩大学は、現在の大学制度の枠組の中で革新の道を拓きつつあるわけですが、大学制度の枠外で高等教育の革新に挑戦する試みとしては、昨年7月に発足した財神奈川科学技術アカデミー(Kanagawa Academy of Science & Technology, 略称 K A S T)があります。

神奈川県科学技術政策委員会がK A S Tの設立を長洲知事に提言したのは、昭和62年10月のことですが、かくも短期間でその提言が実現をみたのは、知事の強力なリーダーシップのもと、同県には他県に例をみない科学技術政策への取り組みがあったためです。いずれにせよ、この委員会の副委員長として提言の作成にたずさわってきた者の1人として、私にはとくに感慨深いものがあります。

K A S Tの目的は、民間ベースでは実行困難な創造型研究開発と取組み、その成果によって、先進県神奈川の21世紀に向けての技術革新を主導することにあります。このためK A S Tでは、終身雇用・年功序列型の組織を排し、有能な研究者の活動を積極的に支援する方式を採用しています。これらはすべて、既成の理工系大学ではなく、科学技術庁 新技術事業団の創造科学技術推進事業(略称 ERATO)に範をとったものです。

一部マスコミで、理工系県立大学院と紹介されたように、K A S Tは産・学・公連繋による社会人を対象とした高度な研究教育機関で、その初代理事長は斎藤進六氏が就任されました。氏は前記委員会の委員長であるとともに、東工大、長岡技術科学大の前学長でもあります。したがって、既成大学の限界を身をもって体験されている氏のもとで、K A S Tが既成大学のなしえないさまざまな革新をどのように実現していくかは、多くの人々の注目するところです。

再び K A S T

各 位

中 村 秀 一 郎

高度な教育と研究を目的とする機関として、既成の大学と KAST を比較した場合、KAST の特徴は何といっても、社会に対して大きく門戸が開かれていることです。

まず、財団の基本方針を決定する理事会は、政府関係機関の理事長、大・中堅企業の経営者、大学の研究者など三十数名によって構成されています。また、財団の研究教育活動に協力するアドバイザリーボードには、江崎玲於奈、福井謙一、F.R. ハートレー、G. ベッソ、金基衛といったノーベル賞級の学者が名を連ねています。さらに財団の事業の基本構想・事業計画については、理事長は外部の専門家によって構成される企画委員会の意見を聞く仕組みになっており、研究開発最前線の情報、科学技術に対する一般社会のニーズ等に精通しているとともに、研究組織運営についての現代的なノウハウをもつ専門家が委員を引きうけ、委員長である私は、この方々の意見のまとめ役として財団運営にも参加しています。

一方、KAST の柱となる研究室は、それぞれの分野のビッグネームを顧問、第一線研究者を室長とし、専任研究員と大学・企業の協力研究者から構成されますが、そこには企業等から ORT (on the research training) を希望する研究生を10名程度受入れます。終身雇用制の海の中で島ともいいうべき、契約制にもとづく流動型研究システムの前途を危ぶむ向きもありますが、新技術事業団のERATOでも参加専任研究員がプロジェクト終了後は、就職先に困るどころか逆に引く手あまたというのが実態なのです。

なお、KAST の専任研究員の報酬制度とか、教育部門の非常勤講師の待遇改善方式には、わが多摩大が独自に発案し、日本で最初に実施に移した試み等が積極的にとり入れられていることも、併せてご報告させて頂きます。

技術と技能

各 位

中 村 秀 一 郎

アジア N I E S の日本産業への追いあげが加速しているといわれます。たしかに量産型の製造業での生産設備のレベルはほぼ同じといったケースも多くなっているようです。しかし私は、高付加価値先端産業については N I E S と日本の格差は開くとみています。

たとえばミクロン単位の高精度、高速加工のための金型の生産現場は、トップレベルの N C 工作機械を整備しているのは当然ですが、これに加えて真円度・三次元測定・デジタル顕微鏡といった測定・検査機器が生産機材として使われ、さらに恒温・恒湿・防振・防塵といった生産環境が完璧に整えられているのです。しかもその上で製品の最終仕上げは、高度な熟練技能者の手作業がキメ手となっているのです。問題はこのような技能者の高齢化が進み、その後継者養成のためのシステムが全く未確立なことなのです。

事態はファッションの世界でも全く同じです。“このままで日本のおしゃれはダメになる”というのが山本耀司さんの持論です。デザイナーになりたいひとはいくらでもいるが、ものづくりに徹しようとする人間、パターンナー・グレーダー、そしてしっかり針の持てる人は、きわめて少くなっているからです（山本・中村対談“ものづくりと人のスキル” FP89 年 9 月号）。山本さんはものづくりの出来るデザイナーの養成のための学校づくりに取組まれようとしているのですが、私はそれに出来るだけご協力したいと思っています。

ともあれ知識、技術とともに、それとは異質の技能教育に本格的に取組むことが、先進産業社会のさし迫った課題となっているのです。多摩大では、技能の大切さ、技能に生きる人々の価値を、学生諸君に理解・体得させたいと思っています。

学長の鈴

各 位

野 田 一 夫

すでに新聞報道でご承知かと存じますが、今年度の多摩大学の入試倍率は“2年目のシンクス”を悠々と破って、昨年（名目35.7倍）を上廻る勢いです。入試倍率とは大学の内実を示す指標であると私は思っておりませんが、しかしそれが、内実に対する世間的評価（いわゆる人気）の尺度であることは、誰も否定できません。しかも少くとも自由社会では一般に、人気と内実との間には極めて高い相関関係があるのです。

いい例として亜細亜大学を考えてみましょう。率直に申して、数年前まで同大学は入試倍率も低く、最も目立たない大学のひとつでした。しかし衛藤瀧吉氏が学長に就任してこの方、知名度はみるみる上り、今年度は各学科とも20～40倍という入試倍率を記録するに至りました。これは、衛藤学長がその特異なキャラクターを生かし、大学学長としては明治以来前代未聞の広報活動を華麗に率先実行したからだけではありません。同氏は、同大学の経営から教育にわたる全分野の体质改善と構造改革を果敢にかつ徹底的に推し進め、その結果亜細亜大学は、今や昔とは打ってかわった活力ある大学へと変身しつつあるのです。

かねてから親しかった衛藤氏と先日ある新聞紙上で対談しつつ、私は同氏の理想と情熱と実行力に対し改めて心から深い感銘を覚えました。私は各位に、同氏の著書『学長の鈴』（読売新聞社）のご一読をおすすめします。そのオビにこの本の標題の由来として曰く。

「……私は秘書に鈴を持たせた。会議中、私は時々大声をだす。そうなったら鈴を鳴らして教えてくれるよう秘書に頼んでおいた。しかし、鈴は一度も鳴らなかつた……と、私は思った。『いえ、何度か鳴らしたのですが学長がお気づきにならなかつたのです』、私は恥じ入った……と。

この気迫！ 私共もこの気迫を絶対に失ってはなりません。

Hahakoのおかげで……

各 位

野 田 一 夫

先日家へ帰ると、居間のテーブルの上に娘が買ってきたHanakoが置いてあり、その表紙の「これからは“ホテルが目的”で旅に出る」という大きな活字が目にとまりました。早速ページをめくると、旅好きな私ですらほとんど知らない各地のホテルの紹介記事。たまたま数日後の札幌出張を控えていた私は「新しく誕生した個性派ホテルには、旅人の心を和ませる力が潜んでいる」というロテル ド ロテルに泊りたくなりました。

そこで、翌日オフィスに出るや否や、早速ホテルの予約変更をして貰い、日曜の午後は、何か浮き浮きした気分で機上の人となりました。ところが札幌へ着くと、迎えの車の運転手はそのホテルの名さえ知らず、所在番地のあたりへ行ってもウロウロする始末、やっと教えられたのが、凡そホテルらしからぬ小さなビル。麻布か原宿あたりにありそうなしゃれたカフェ・テラスとプティックにはさまれた狭いエントランスを入り、半信半疑で階段を2階に上ってみて、始めて私はホッとした。そこはもうヨーロッパの小ぶりで高級なホテルを連想させる、実に簡素であかぬけたインテリアのロビー。自室の調度類、朝食を摂った最上階の食堂の雰囲気、従業員の行き届いたサービス……。Hanakoのおかげで私は“泊ること”を満喫しました。

さて、今週は多摩大学の入試。志願者は昨年を上廻り、逆に欠席者数は昨年を下廻ったことからも推察されますように、「新しく誕生した個性派多摩大学には、若者の心を魅きつける力が潜んでいる」という評価は、2年目にして高校生の間に一応行き亘ったようです。問題は、私共が今後この人気をいかに定着させ、更に向上させるかです。変転して止まない時代環境の中でとくに移ろい易い若者の心を想う時、多摩大学は今から来年度の入試の戦略構想にとりかかる必要があります。

早治大学唯野教授

各 位

野 田 一 夫

「大学の講義は12分遅れて始まり12分早く終るのが常識とされている。これをだいたい正確に守れぬような教授は学生から教授として扱ってもらえない。だから唯野も正確に12分早く『比較文学論』の講義を終え、49号館の726番教室から廊下へ出た。新学期になって最初の講義だ。もちろんノートは助教授時代以来5年越しの使いまわしである。……」

目下大評判の小説『文学部唯野教授』の書き出しはこう始っています。いやこれ程の余裕をもった皮肉でこれ程徹底的に日本の大学（制度および人間）をコケにした文学を、私は他に知りません。しかも、現行の日本の平均的大学の現実がこの架空の大学「早治大学」よりマシかヒドイかは程度の差であることは、大学で学んだ経験のある日本人なら誰でも納得でき、共鳴を禁じえないところに、この小説の人気の原因があるのです。

多摩大学の設立目的は、この小説で散々愚弄されている現行の大学の現実を打破することにあります。大学は研究機関である前にまず教育機関であり、しかも、大部分の学生がそこを卒立って一生を活動の舞台とする“社会”的要望を充すための周到な準備の場としての教育機関でなければなりません。その意味で多摩大学の価値は、入試倍率に反映される高校生の間の人気によってでもなければ、入学生の“偏差値”によってでもなく、正に今後数年後本学を卒業していく学生に対する社会（具体的には採用する企業またはその他の機関）の評価によって、はじめて正しく測られるであります。

近く別便にて各位に対し、本年度多摩大学入学式（来る4月10日、於「パルテノン多摩」）のご案内状をお送り申し上げます。万障お繰り合わせの上ご出席賜わり、本学2期生の前途を私共教職員と一緒に祝って下されば幸甚に存じます。

老いてなおジャンヌ・モロー

各 位

野 田 一 夫

ジャンヌ・モローといえば、少くとも私達の世代なら「現金にて手を出すな」「小間使の日記」……等のなつかしい映画のシーンのいくつかを回想するでしょう。とくにギャングの情婦といった役で“女”的哀れさとしぶとさを演じさせたら、恐らく彼女の右へ出る俳優は昔も今もいないはずです。

そのジャンヌ・モローの舞台芸を、20日夜赤坂「草月ホール」で堪能しました。プロッホの原作をクリューバーが演出し、彼女の主演でパリで大好評を博した『ゼルリンヌの物語』が、そのまま日本へやってきたのです。主演といっても、この作品は一人の老女が、昔さる貴族の館で小間使いとして働いた頃の想い出を鬼気迫る情念をこめてながながと語る独白劇みたいなものですから、せりふの微妙な言いまわしと繊細極まりない表情や動作といった高度な演技力が俳優に要求されます。

高潔な人柄の男爵へ寄せる秘められた熱き心、不倫の愛に耽溺する夫人への憎しみ、ゼルリンヌは夫人への復讐のおもいを込めて相手の男を誘惑します。……思いがけず経験しためくるめく愛欲の歓喜の底になおうごめきつづけて止まない男へのさげすみと執着の葛藤……。フランス語を解しない日本人観客に対して、こうした複雑怪奇な女性心理をその卓越した演技力で適確に伝え、しかも1時間半という時を忘れさせてくれたジャンヌ・モローに、心から感服しました。

情報化社会に活動しようとする人間に於て、優れた“表現力”こそは最も必要な資質です。多摩大学は1~2年の一般教育の中で、必修科目として実用国語（書く、話す）を、また選択科目として「音楽」「絵画」の他に「演技」を設置しています。とくに「演技」に関しては、教室での頭で学ぶ教育とともに、素晴らしい映画、演劇、パフォーマンス等から五感で学びとる学外教育を重視したいと考えています。

海図なき航行

各 位

野 田 一 夫

一枚の色紙に筆ペンで「海図なき航行」という6文字が記されていき、その色紙がズームアップされて、番組は終りました。私がよく視聴するNHKの「日曜インタビュー」、今週のゲストは東京大学先端科学技術センター（先端研）長 柳田博明氏でした。「海図なき航行」は柳田さんの一番好きな言葉、いかにも“化学認識機能材料”という未踏の分野の研究開発と日々とりくむ学者の心意気を感じさせませんか。

先端研はかねてから東大有志教授の間で練られてきた「高等研究所」構想が形を変えて誕生したもので、したがってその構想の根幹にあった「学際性」「国際性」「公開性」（業績）

「流動性」（人材）という4大方針を堅持し、高度な研究活動を自由闊達に行いつつ先端分野で必要とされる人材を育成することを狙いとしています。この方針は何と私共多摩大学にもKAST(TIMIS 40・41号で中村秀一郎氏が紹介された助神奈川科学技術アカデミー)の設立理念にも相通ずるものです。

知性にあふれた実に端正な顔立ちの柳田教授が「ご趣味は？」の間に何のためらいもなく「カラオケです」と答えられた時は、正直いってびっくりしました。しかしそのあとで「われわれ日本人研究者は一般に自己表現力が乏しく、このことが国際交流はもとより異分野交流の面からも大きな障害となっていますが、カラオケは単に研究生活の息抜きのためばかりでなく、自己表現力の向上に役立ちますからね…」という意味のことを言われてニッコリされたその表情は、正に値千金でした。

カラオケといえばこの人を置いて他にないわが中村学部長は、その言に必らずハタと膝を打たれるに違いありません。専ら“陰湿閉鎖的”と評してきた日本の学者・研究者の世界にも、どうやらやっと新時代の爽やかな風が吹き始めたようです。

憂鬱な季節

各 位

野 田 一 夫

数日前ある会食の席で、隣にいた日本ソフトバンクの孫社長から急に「野田先生、岩屋毅さんが大分2区で当選したんですよ……」と話しかけられました。一瞬面喰った私に孫さんはすかさず「ずっと昔、南部さんのパーティでご紹介した、あの大男の……」と、私はやっとその人を想い出したのです。

岩屋毅氏、昭和32年生まれ。早大卒、在学中より政治家を志し、松下政経塾第一期生に応募、松下幸之助氏の最終面接で不合格となり、涙を呑む。独力で初志を貫徹すべく帰郷、昭和62年県議選挙に立候補してトップ当選。本年の総選挙のために県議を辞して立候補、見事国會議員の座を獲得、弱冠32歳。

新時代の政治家の養成を目ざされた松下幸之助氏といえども、この人材を見抜く能力はなかったのでしょうか。今年度の多摩大学は、入試倍率からみるとかぎり、昨年に劣らず難関でした。1人を合格させることは数十人を不合格とすることです。人材を見分けるのにあらゆる努力をしましたが、結局は今年も入試の点数をキメ手にせざるをえませんでした。大学教師として毎年私は、入れた学生より落とした学生のことが気がかりでなりません。そしてこの憂鬱な季節には必らず、昔読んだサン・テグジュペリの次の言葉で私の心はうずくのです。

「……おとなというものは、数字が好きです。新しくできた友だちの話をするとき、おとなのは、かんじんかためのことはききません。〈どんな声の人？〉とか……〈チョウの採集をするの？〉とかというようなことはてんできかずに、〈その人いくつ？〉とか……〈おとうさんは、どのくらいお金をとっていますか？〉というようなことをきくのです。そしてやっとどんな人かわかったつもりになるのです……」（『星の王子さま』内藤灌訳、岩波書店）。

“海の都”の教訓

各 位

野 田 一 夫

近く二期出版社より刊行される「大学シリーズ」で最初に多摩大学がとりあげられることになり、先日監修者である評論家の室伏哲郎氏と対談しました。すでに多摩大学のことを何から何まで知っておられる室伏氏は、多摩大学のこれまでの成功を高く評価されながらも、将来の発展のための基本的問題点として“規模の制約”をあげられました。正にズバリのご指摘で、かねてから私自身が思いをめぐらせていました。

多摩大学が目ざすものは、当然のことながら、日本を代表する総合大学です。しかし、そのためにわれわれは現在の“規模の不利益”をどうやって克服するかという戦略を策定し、関係者全員の知慧と努力を投入する必要があります。幸い古今東西の歴史の中には、人間の知慧と努力が大きな障害を見事に克服した事例は枚挙にいとまがありません。

若い頃から私が一番魅力を感じてきた国はヴェネツィア共和国です。アドリア海の最奥に位置した一都市国家、しかも最盛期においてすら人口わずか20万人でしかなかったヴェネツィアは、十世紀の中頃以来何百年にもわたって、アドリア海から東地中海にわたる広大な地域を支配しえたのです。塩野七生さんの名著『海の都の物語』（中央公論社）を読まれた方も多いことでしょう。この本を読んで感激した私は、かつて欧州出張の折、彼女に会うのだけが目的でフィレンツェにまで足をのばし、“ココリコ”というレストランで宵の口から曉方まで彼女とヴェネツィアについて語りあかしたことを、今懐しく想い出します。「……とくに英雄っていなかつたのにねぇ。だけど、どの国よりみんな勤勉で利口だったのよ……」と言った彼女の言葉が忘れられません。

次回で、本学が弱点を克服するための一提案を致します。

各 位

規模の不利を超えて

野 田 一 夫

千代の富士が遂に通算 1,000 勝を達成しました。この大記録は、彼の体が幕内力士中最も小さいだけに、なお更燐然と輝きを増すのです。しかしいかに小さいとはいえ、今の彼には 183cm の身長と 122kg の体重があります。もし彼の身長が 10cm 低く、また体重が 20kg 軽かったら、いかに非凡な素質にめぐまれ、いかに人一倍の努力を重ねても、彼が相撲の世界でかくも大輪の花を咲かせることは絶対に不可能だったでしょう。

このように、何事につけ、“大きさ”はすぐれた“実績”にとっては無視できない条件です。多摩大学は、「21世紀を拓く」という、雄大な理想をもって発足しました。この理想の実現にとって、多摩大学の現在の大きさ(敷地 33,000m², 学年収容定員 160 名)は確実に頭の痛い問題です。したがって多摩大学は、今後是非とも独自の成長戦略を実施に移していく必要があります。具体的には、時代性のあるユニークな学部・学科を着実に増設しつづけ、“総合大学”への道を歩むことです。しかし、母体である田村学園には一定の方針と経済的制約がある以上、多摩大学が総合大学になれるのは困難だ、という悲観論もあります。実は私自身は、そんなことは何とも思っておりません。

今や日本では、大学をめぐる世界には鬱勃とした気運が高まり、古い大学での改革の波と新しい大学設立の波がひしめいています。幸いこうした波の担い手である人々の多くが、多摩大学に対して熱い視線を送ってくれております。真に本学設立の理想達成を念願するなら、私共はこうした方々に進んで協力し、本学と理想を共にしながら教科内容を異にする大学の実現に力をつくそうではありませんか。そして、将来これらの大学同士で新しいリーグを形成し、リーグとして“総合大学”的の実を擧げるといった途もあることを決して忘れてはなりません。

各 位

道は果てしなく遠くとも

野 田 一 夫

平松守彦氏（大分県知事）から最近出版された『グローバルに考え、ローカルに行動せよ』が送られてきました。表紙を開くと「畏友、野田一夫様 平松守彦」と、あの懐しい、筆太でいかにも男らしい達筆の署名が目にとびこんできて、20年にわたる友情の暖かさがほのぼのと心を満たしてくれました。

「一村一品運動」「“豊の国”づくり」「九州議会構想」等々卓越した発想から次々に打出される政策とそれらを推し進めていくための想像を絶する行動力、今や平松さんの名前は日本全国ではもとより、世界中にひびきわたっています。昭和50年国土庁の審議官のポストを捨てて平松さんが副知事に就任した直後の大分県は、県民1人当たり所得で47都道府県中43位でしたが、平松県政10年後、それは31位へ急上昇、その後も躍進はつづいています。人気度において、平松さんが全国知事中断トップの1位を毎年占めているだけのことはあるのです。

しかし、平松さんの人気の源泉は、県政の実績よりもっと深いところにあります。あの豪快でどこか人懐っこい風貌、堂々たる体格にしては実に機敏な動作、存在全体がかもし出す独特的の明るさ、知性と品性、信頼感……、いわば政治指導者に望まれるあらゆる人間的属性を具備している故に、平松さんが東京を去って15年たった今も、昔からの友人・知人によって「平松守彦を総理にする会」も存続しつづけているのです。

その平松さんの趣味の1つはカラオケ、愛好歌の1つは「若者たち」。とくに「君の行く道は 果てしなく遠い だのになぜ 歯をくいしばり 君は行くのか そんなにしてまで」という歌詞をこよなく愛する平松さんは、多摩大学の力強い支援者であることをご存知ですか。小さいながらも多摩大学が大きさを理想を掲げて発足し、教職員全員がこの理想の実現のためにひたむきに頑張っているのを信じて下さっているからです。

開学一年を顧みて

各 位

野 田 一 夫

開学後早くも1年、正に「光陰矢の如し」の感一入です。しかし、新設でありながら多摩大学がこの1年間に世間で得た望外の評価と知名度は、私共の努力が決して無駄でなかったことを実証してくれます。もちろん「油断は禁物」、3月23日の午後から深夜にかけて、本学の全教員は伊豆弓ヶ浜「観水荘」で徹底したティーチインを行い、①多摩大学の教育理念、②学生の学習態度と意欲について、③学生の学内外の生活について、④教員の教育研究システムについて、⑤希わしい多摩大学の将来、の5点を議論し合いました。

私が立教大学に在職した33年間のうち、教員全員が教育の現状と未来をこのように時間をかけて熱心に議論しあった経験は、ただの一回もありませんでした。それだけに私は、本学の同僚教員の方々の意欲を本当に嬉しく思っています。教育の成果は、個々の教員の思い入れだけで目に見えて上っていく程単純なものではありませんだけに、私共は互に激励し合い知恵を出し合って、たゆまぬ努力をつづけて行く必要があるのです。

明治以来日本の大学にはなかった「年間講義案」「休講なし」「時間厳守」という本学の教育三大方式はこの一年でほぼ順調に軌道にのったようです。また、教員の“研究”が“教育”的足を引っ張らないでという希いを托して計画した多摩大学総合研究所も、この1年間の試運転の結果は上々で、今年は本格的活動を開始する予定です。ただ、開学前から本学の最大の特徴であり使命であることを強調してきた“対外活動”が全般的に低調であったことには、悔恨が残ります。設備の完成が遅れたこと、開学後の諸業務に私共が忙殺されたこと……等々原因はいろいろ挙げられますが、これをやらないうちは本学は片肺飛行中だということを心に銘じ、今年は実行しようではありませんか。

21世紀を拓く

各 位

野 田 一 夫

春4月、新生多摩大学は開学2年目を迎えます。規模は小さくとも、多摩大学は大きな理想を掲げて発足しました。この理想は「21世紀を拓く」という7文字に集約されます。しかもこの7文字は、創立者である私どもにとって漠然とした希いではなく、冷静な情勢分析を踏まえた極めて具体的な目標なのです。

21世紀の日本の経済社会は、今世紀とは大きく異った様相を呈するに違いありません。今日すでに識者によって“情報化”，“国際化”，“ソフト化”……と称されている時代的趨勢は、今後ますます顕在化していくでしょう。したがって、20世紀の現実を前提としてつくられ存続してきたあらゆる組織は、その慣習的考え方や体制を刷新しないかぎり、21世紀において更なる発展をとげることは絶対に不可能です。

少くとも産業界では、多くの企業が時代の流れを敏感に察知し、懸命に改革の努力を重ねています。ところが、教育界の時代感覚たるや産業界と対照的であるというほかはなく、とくに伝統を誇る大学ほど、過去の権威と因習の上にあぐらをかき、偷安の夢をむさぼっているといつても過言ではありません。

私どもはこの現状を十分認識し、今後の時代環境に対応するために以下の3大方針を定め、それらを実現するのに必要な諸条件を整備した上で、多摩大学を設立したわけです。すなわち、①教育の対象を一般学生から社会人へと限りなく拡げること、②在来のように教授個人本位の研究から、グループないし組織本位の研究に重点を移し、“シンクタンク”としての発展を策すること、③大学にとってふさわしいと思われる新事業を積極的にとりこんでいくこと、の3つです。

未来都市多摩ニュータウンの高台に立地し、快適にして機能的な施設・設備をそなえ、社会で立派に通用する教授陣を揃えたのは、正にこの方針の実現のためであることをご理解下さい。

各 位

學問要從非學問來

野 田 一 夫

'89年度「ヴェネチア国際映画祭」でグランプリの栄冠に輝いた台湾映画『悲情城市』が、今月末から全国主要都市で一斉に公開されます。先週木曜日(12日)青山のスパイラル・ホールで行われたそのプレミアショウにお招きをうけて、大きな感銘を受けました。映画そのものより、この作品を完成させるために、豊かな才能に恵まれ、経験をつみ、そして若くして名を成した30~40歳代の一群の入材が国を超えて協力し、友情の素晴らしい成果を私達の前に披露してくれたからです。

この映画の監督は台湾育ちの鬼才侯孝賢(ホー・シャオシェン)氏ですが、作品の内容が終戦後の本省人と外省人との対立抗争を扱うものであったが故に、台湾で完成させるのにいろいろ障害があった上、資金調達も危ぶまれました。そこで、かねてから侯氏の友人であった作曲家三枝成章氏の仲介で製作に矢内廣(びあ株式会社社長)、音楽に新田和長(株式会社ファンハウス社長)両氏が衷心協力し、この作品を完成させたのです。

当日上映に先立ち、三枝、矢内、新田三氏と侯監督とが並んでステージに立ち、観客に向って順次挨拶をしたあとライトに照らされながら微笑んだ顔は、何れも知性と逞しさと品位にあふれていて実に爽快でした。家へ帰ってテレビの画像に映った現在の日本の政治指導者の顔と見比べながら、日本にもそしてアジアにも新しい時代が来ようとしていることを確信でき、その夜は殊のほか安らかな気持で眠りにつきました。

「電影要從非電影來」(映画は映画の外より来る)は侯氏の座右の銘であるとともに、全作品に反映される信念です。すなわち、映画は彼にとって彼の生きている“現実の世界”的本質を明らかにする手段なのです。この句は「學問要從非學問來」(学問は学問の外より来る)と双を成しています。何と、私ども多摩大学の教育理念そのものではありませんか。

“退学勧告”をめぐって

各 位

野 田 一 夫

先週金曜日(20日), 国立京都国際会館で開催された「京都フォーラム」という会議に出席してきました。『学校の危機』が今年のテーマでしたが, 出席者のほとんどが, 小学校から大学に至るわが国の現行の教育のあり方に対して深刻な危機感を抱いておられる反面, 実現の期待できそうな改革案をもち合わせておられないように見受けられました。

小生は小・中・高等学校の教育については知識も関心ももつておりませんが, 今日の日本の大学教育についてさほどの危機感を抱いておらぬ反面, 多摩大学において現に試みられているような政策の実現に大きな自信をもっているだけに, 教育者として幸せです。……と思いながら翌日帰京の車中で朝日新聞を開いてみると, 「成績不良者に退学勧告」という大見出しで, 多摩大学のことが派手に報道されていてびっくりしました。

他の新聞も報道したようですが, 一定の学力水準に達していないと判断される学生に厳しく臨むのは大学として当然のことで, 今回の本学の措置がニュースになること自体, 日本の大学の世界の現状は世間の常識からみて大いに狂っているのではないでしょうか。前述の会議にオブザーバーとして出席していたフランスの大学教授が, 日仏の大学教育の在り方を質ねられた時, 即座に「日本の大学はフランスと同じように, 入ることは難しい。しかしフランスの大学は日本と違って, 卒業することは入学するよりもっと難しい……」と答えました。実はこれが, 日本を除く大部分の国の大学の常識なのです。

本学は今後も“退学勧告”を含めあらゆる措置を断行していくますが, 措置が不公平とのそしりを受けないためには, 小生を含め教職員のたえざる自覚と実践が必要です。“退職勧告”も, やはり可能性としてなければおかしいのです。

教育とは何か

各 位

野 田 一 夫

『……「この中に、勉強が嫌になった」といっているヤツがいるそうだ。だけど人間は、生きてる限り、死ぬまで、毎日毎日が勉強なんだ。だから、勉強が嫌になったのなら生きている意味がない。オレが殺してやる。オレに殺されて悔しかったら、地獄の底から化けて出てこ—いっ』って。中肉中背、温顔でいつもニコニコしてた先生が、そう言ってポロポロ泣いてるの。こりゃオレのことだと思いながら、電気のムチでひっぱたかれた気がした。友達も、「わーこえー」といいつつ泣いてた。…』

お読みになりました？ 先日多摩大学の“退学勧告”を大きく報じた朝日新聞朝刊（21日）の記事と隣り合わせに載っていた小田島雄志氏の「私と先生」。私はこの談話記事を読んだ時、こみ上げてくる涙をこらえられませんでした。中国で終戦を迎えた小田島氏は、日本に引き揚げてきて東京の中學に編入されました。暗い世相と苦しい家計の中で日頃さしも知的好奇心にあふれていた氏も時に友人に弱気の言葉を吐いたのですが、その言葉が担任の先生の耳に入った時、その先生は血相を変えて教室に飛び込むや、冒頭の言葉で怒鳴ったというのです。

氏とほぼ同じ時期に青年時代を過した者の一人として、私は改めて「教育とは何か」を真剣に考えさせられました。建物や設備がどんなボロでも、教師の側に信念と情熱があり、また学生の側にヤル気と知的好奇心さえあれば、教育は基本的にはその目的を十分に達することができるのです。終戦直後のわが国は、国破れても幸い人心は荒廃しきってはいませんでしたが、戦後40年、万人の予想を超えた経済的繁栄の中にあって、教育のため最も必要な人間的属性は、教える側でも教わる側でも正に失われんとしています。多摩大学は、何としても、大学教育の灯をこの国で再びあかあかと照らしてみせようではありませんか。

競争の精神

各 位

野 田 一 夫

ゴールデンウィークも終りました。長い休日をいかがお過しましたか。小生は狂ったようにいろいろなスポーツにとくみましたが、とくに連休直前の月曜日の夜、親しい友人たちと久方ぶりに軟式野球を、それもあの後楽園ドームで楽しんだことは、忘れられません。素人とはいえ、ああいう場所でする以上は、トレーニングウェアに運動靴ではサマになりません。それだけに、これまで何回も捨てようとして捨てきれなかつたユニフォームとスパイクシューズへの未練の甲斐があつたと、小生は“正装”した自分に独りホクホクしていました。

結局、試合は10-6でわれわれのチームが敗れましたが、何しろ平均年齢で、45~50歳の両チームのメンバーが最後の最後まで試合を捨てず“勝つために”頑張りましたから、試合が終った後の気分は、喉にしみわたる冷えたビールのごとく爽やかなものがありました。連休が終るや否や、学校から連絡あり、本学の斎藤聰子(2年生)、川口嘉治、高田広忠(1年生)3君が先日行われた東京都珠算コンクールの団体競技一般の部で見事優勝したことを知らされました。多摩大学の学生が世間の注目を浴びるだけの秀れた実績をあげてくれたのは多分開学以来初めてのこととて、心から快哉を叫んだ次第です。

何事につけ、競争は人間にヤル気を与え、知恵を働かせ、精神を集中させる点で、能力向上と技術進歩の源泉です。もちろん厳正なルールがあるとはいえ競争は一種の“戦い”ですから、時には“怒り”とか“悔しさ”といった心情を誘発させます。“平和”とか“平安”は人間にとて永遠の共通の希いですが、“競争”をいたずらに回避したり恐れたりする人々にとっては、“平和”も“平安”も現実に無縁なものとなるでしょう。“逞しい”知識人を育てること、それこそが多摩大学の理想です。

今 なぜか多摩大学が……

各 位

野 出 一 夫

朝日新聞ほか各紙が報じた本学の例の“退学勧告”の記事の余波が現在まだ続いていることに私はすっかり驚いています。新聞や雑誌の取材やインタビュー、講演やシンポジウムの講師としての出席、手紙や電話での質問とか相談……といった形で、世間では本学のやったことまた今後やろうとしていること（たとえば一部教員の退職勧告等）を私からもっと知りたがっているのです。

私どもは当り前のことをごく当り前の形で実施に移していくだけですのに、現在の日本にはニュースのネタが余程ないのか、あるいは私どもが当り前と思っていることを実行するのが困難な状況が一般化してしまっているのか、本学だけが特別視されるのはまことにおかしい気持です。何れにせよ、“退学勧告”なぞ本学にとって大した措置ではありませんし、また世間での予想外のもてはやされ方にいい気になって上乗りする気も、私には全然ありません。本学は本学設立の理念を、長期的視野のもとに正々堂々と実現して行くつもりです。

ところで、本学をめぐるちょっとしたこの騒ぎの最中に、一冊の本が出版されました。室伏哲郎編「多摩大学」（二期出版）がそれです。さすがに当代一流の評論家として世間的評価の高い室伏氏が責任をもって編集されただけに、本書は読み易さの割りに実に内容のある本であることに感心もし安心もしました。多摩大学が、小さいながらどのような理想をもって設立され、またその理想がどのような形で実現されつつあるかが、大学の構成と活動領域のすべてに亘って、つとめて客観的に叙述されています。本学の“退学勧告”に関心を持って下さる方なら、せめてこの本ぐらいは読んで下さった上で、とひそかに念願できるだけの出来映えの本です。是非ともご一読のほどを……。

東欧の旅から

各 位

中 村 秀一郎

東欧を旅行して全く予想外だったのは、大都市プラハとブダペストの自動車公害でした。西側の車がほとんどなく、ソ連のラーダや東独のトラバントといった排ガス浄化装置のない、日本の水準からみればおよそ整備不良の車が走りまわっているわけですから、当然のことといえばそれまでですが、それにしてもひどいと思いました。

この二大都市にはほぼウイーンをみる路面電車ネットワークがあり、プラハには地下鉄も三線あります。発展途上国の大都市とは違って一応公共輸送機関が整備されているのですが、それも自動車公害抑制にはほとんど役立っていません。

地方都市や農村地域には自動車公害の代りに産業公害があるようです。今度の旅の目的はハンガリーの組織・経営学会への参加でしたが、この会合の開かれた中世風の雰囲気を残す“ハンガリーの京都”セーケシュフェヘールバルでも夜ホテルの窓を開けると、かつての京浜工業地帯の化学工場を想い出させる悪臭が漂ってきました。エネルギー源として多量に利用されている褐炭の脱硫装置を含めて、日本の公害防止技術は、東欧の環境問題解決に寄与するところ大きいと信じます。

帰途立寄ったイスタンブルには、ボスポラス海峡沿いに、トルコ共和国の父といわれるアタチュルクの亡くなつたドルマバフチエ宮殿という美しい文化遺産があります。ところが日本の大手建設会社が外資と提携して、この宮殿の上の丘の緑地を切り開きホテルを建設中です。昨年の地方選で当選した野党社会人民党系の新市長は、世論を背景としてこの建設を環境破壊とし、ブルドーザーを使ってこの工事を阻止すると訴えているそうですが、環境問題を解決する技術に自信を持つ日本人なら、こうした問題にはもっと敏感であるべきではないでしょうか。

ギャラクシー賞

各 位

野 田 一 夫

わが国では、テレビといえば不幸なことに、"俗悪番組"というのが合言葉になってしまっています。たしかに夜家へ帰つてテレビをつけると、いい年齢をした大人がようやるよ、といいたい程低俗でしかも面白くも何ともない番組ばかりでがっかりしてしまうことが多いのですが、しかし毎日の新聞紙面でテレビ欄にざっと目を通すと、結構視聴したい番組もあるにはあります。最近はビデオへの収録も驚くほど便利になりましたから、私などは友人達の中ではテレビをよく楽しんでいる方だと思います。毎年オリジナルを放送番組の中で優秀な作品に与えられる"ギャラクシー賞"という表彰制度があります。約150人の評論家、専門家等が慎重に選挙するもので表彰主体は「放送批評懇談会」。この会の理事長は私の敬愛する友人、放送評論家の志賀信夫氏。志賀氏も多摩大学の非常勤講師として今年から「コミュニケーション論」を講じておられるのはご存知でしょうか。

今週月曜(28日)夜、赤坂プリンスホテルで1989年4月1日～1990年3月31日までに放送された作品に対する第27回ギャラクシー賞の表彰式と披露宴がありました。特別賞はNHKスペシャルの「北極圏」(日本放送協会)で、私も感銘を受けた番組、個人賞は「ニュースステーション」のキャスター久米宏氏で、私がほぼ毎晩視聴している番組でしたが、衝撃を受けたのは、今回のギャラクシー賞にノミネートされた13作品のうち、私が視聴していたのはたった1つしかなかったことでした。しかも推薦理由を読むと、何れも興味をそそられるものばかり、テレビが俗悪な番組ばかり流しているわけではないことを改めて痛感させられ、早速その夜は早々に帰宅し、NHKの「アマゾンの大森林」を心ゆくまで堪能した次第です。

ハンガリーの経済・経営学者たち

各 位

中 村 秀 一 郎

5月2日～5日のハンガリー組織・経営国際学会では、私はマーケティング部会で公開講演にもなった「技術革新に挑戦する日本の中小企業」と題する報告（英語）をおこないました。こういうテーマを取り上げたのは、社会主義圏には“西側諸国”以上に巨大主義に関する迷信が強いからです。

この学会でとくに興味をもったのは、「われわれは観念的には市場経済を知っている。だがそれへの移行の手本は全くない」ということを基調としたブタペスト経済大のアティラ・チカン教授の報告でした。この学会に参加されていた専修大の三教授を加えた氏との懇談は、30分の約束が90分にも及びました。

「社会主義の枠組は市場経済を本質的に阻止する」、「もう10年早ければ移行はやさしかった。対外債務の増大と労働力不足は困難をもたらしているのです」、「社会主義の枠=人民的所有の本質は官僚支配そのものだが、不十分な品質と品揃えを必ず生むこのシステムは、国民の欲望に答えることはないのです」、以上がこの対話のなかでの印象的な氏の言葉でした。

KOPINT-DATARG（景気・市場調査研究所）からの依頼で5月7日、西側に対して比較優位を持つ特定産業の育成と企業改革論を論点とした講演「ハンガリー経済改革への提言」を同研究所でおこないました。そこでは、体制の如何を問わず現代の企業は実質的に従業員のものであるべきで、証券市場をふくむ活発な市場の競争はそのエゴイズムを排除しうること、国民の企業への信頼が失われるとき経済発展は絶望的となることなどを強調しました。国有企業の管理者が安く外資に企業を売却し、社長として居据るといった事態に対し、国が資産管理庁という組織をつくり、国有財産の保全に乗り出すというニュースに接したからでもあったのです。

16日 18時10分

各 位

野 田 一 夫

先々週のおわりから先週一杯、NHK「特報・首都圏'90」の取材班は、学長の私をはじめ多摩大学の関係者の多くを実際に精力的に取材して廻られました。この結果は今週土曜(16日)の18時10分からNHK総合テレビで放映されますから、本学にご关心のある方は是非ともチャンネルをお合わせ下さい。

このテレビ番組はご承知のごとく、放送時間帯が一般視聴者にとって絶好であることのほか、何といっても、ニュース性の高い話題を主として当事者のナマの声および表情を通して毎回たくみに掘り下げるという手法の成功によって、すでに6年間硬派の“人気番組”の座を守りつづけています。先々週の中頃この番組に関しての取材のご依頼があった時点では、私はごく軽く考えておりました。つまり、このところマスコミではしきりに大学の問題がとりあげられていますから、この風潮の中で、新らしい方向を歩んでいる大学のひとつとして多摩大学がとりあげられただけだと信じきっていたのです。

しかし、取材依頼が単に学長室でのインタビューだけにとどまらず、私に関するても学内はもちろん学外でのさまざま日常活動にまで及んでいく過程で、はじめて私は、30分間の放送番組がまるまる本学にあてられているという制作意図を知って驚きました。それにしても、ディレクターからカメラマンまで取材班がたった30分(といっても、この種番組では極めて長い方ですが)の番組制作のために費やされた時間と努力には真に頭が下がります。それこそ早朝から深夜まで、私共の情報にもとづいてあらゆるところへ足を運び、納得のいくまで聞き直し撮り直すわけですから、私だけの単独インタビューでも優に4時間を超えたはずです。

この番組への皆様のご感想を楽しみにいたしております。

多摩大の敵は多摩大である

各 位

中 村 秀 一 郎

多摩大が開学二年目に入るとともに，“挨拶を大切に”，“休講なし，講義は定刻”，“550ページを超える年間講義案（履修項目）配布”，“成績不良者への退学勧告”などの実施が，世の注目を集めようになってきました。既成の大学をモデルとしない，ナンバーワンよりもオンリーワンを目指す多摩大の理念と戦略は，広く理解されはじめたようです。

しかし「21世紀を拓く」その理念の追求には，一日も手を抜くことが出来ないというのが実感です。というのは，フツーの大学にしても，なにもフツーを目標としているわけではありません。それぞれ理想を掲げ，新しい挑戦を試みようとする教職員もいるのですが，結果としてはとくに特色のない大学を存続させることになってしまっているのです。このことは，日本の大学の慣習と惰性の克服が，異常というべき努力の結集と持続なしにはありえないことを教えてくれます。多摩大とても例外ではありません。現状に安住することなく，経営側と教学側とが一致してたえず理想に向い革新に挑戦しつづけることによってのみ，多摩大は多摩大たりうるのである。その意味で現実の多摩大は，常に理想としての多摩大の敵なのです。

よく大学の入学案内などで，「学ぶことは楽しい」といったキーワードに出合うことがあります。大間違いでしょう。ただし学ぶことの苦しさ，厳しさをつき抜けたとき，人にははじめて身ぶるいするような感動があることもまた事実なのです。このプロセスを学生に体得させることが，まさに大学教育の核心なのですが，それには，教室で私語にふけるといった学生の実態を見据えてなお常に教育の理想を実現しようとする教授陣の創意工夫と努力の結集が不可欠なのです。多摩大は是非それを貫きたいものです。

Ask not what your country can do for you, ..

各 位

野 田 一 夫

帰国してからビデオで、先日放送された本学に関するテレビ番組を視聴しました。30分足らずの番組をつくるのに、撮影したテープの量は優に15時間分を超えたというだけあって、私自身に焦点が当てられすぎていたのが終始気にはなりましたが、全体としてはよくまとめられており、ホッとしました。ただ副題だけは何とも納得できませんでしたので、早速今週月曜日、学内掲示板に以下のような学長所感を表明しておきました。

先日N H K 総合テレビにおいて放送された本学の番組には、「徹底して面倒みます」という副題がついていました。日本の他の大学に比較すれば取材陣にそう受取られたことも致し方ありませんが、本学はそのような教育方針を決して打出してはおりません。本学は大学としてやるべきことをどんどん実施していく反面、本学の期待に応えられないと思われる学生ができるだけ切り捨てていく方針です。われわれは、教職員と一体となって多摩大学のよき伝統を確立しようと努力をする学生にのみ教育努力を集中したいと考えています。そのような学生諸君に対して私は、J. F. ケネディの大統領就任演説の中の有名な一節を真似て、「多摩大学が諸君に何をしてくれるかを他人に要求する前に、諸君は多摩大学に何をなさうかを自らの心に問え」という言葉を贈るとともに、諸君の青春の輝かしからんことを切に祈るものです。

30年前私が米国に滞在している時、若きケネディは大統領戦で劇的勝利を収めましたが、政治家としての彼の評価と人気を不動のものにしたあの就任演説で受けた感銘を、私は今も忘れられません。聖書に発するこの思想は、単に政治、経営のみならず、教育の世界にも時代を超えて通用すると信じます。

時は移ろい、人変らず

各 位

野 田 一 夫

先週水曜日の宵、ところは南青山のライブハウスBLUE NOTE TOKYO、舞台にはディヴィット・マシューズ以下ニューヨークの第一線で活躍するジャズメン6名、曲目は1975年から今年1990年まで毎年のヒットチャートから、粋な演奏となつかしいメロディーで200人を越す聴衆は夜の更けるのを忘れて音楽をたのしんでいました。都市空間の“スペース・クリエイター”という時代先端的な新事業を成功させて波に乗っている㈱グリーンホームズの若き社長中村桂太郎さんが、創業15周年を記念して親しい友人・知人のために催してくれた素敵を集いでした。

規模と伝統を誇る大企業の創業○○周年のパーティーといえば、都心の一流ホテルの大宴会場、名士のあいさつ、大テーブルや模擬店をいろいろ各種各様の料理……というのが常識です。それはそれで悪くはないのですが、恐らくパーティーの様式や演出のことごとに自分で頭をしぼり、苦心惨憺するトップはいないはずです。部下とか業者にまかせれば、結果は慣習・慣例にしたがう最も無難な形におさまるのは、自然の理であります。

この7月1日、通貨を中心とする東西両ドイツの経済統合は万事順調に推移し、今や両ドイツの年内完全統一を疑う人は世界にほとんどいないことでしょう。しかし、昨年の今頃はもちろんのこと今年初頭ですら、ベルリンの壁がかくも速やかにかくも完全にとり払われてしまうことを、一体誰が予測しえたでしょうか。昨日の常識は明日の非常識、といってよい程政治・経済・社会の変化は国内外を問わず激しい昨今ですが、古いもの、大きいもの、権威を確立したもの程、個々の激変の事例から一般的教訓を導きだす柔軟な心を持ち合わせてはいないようです。だからこそ、新しく、小さく、そして未だ知名度の低い多摩大に絶好のチャンスの訪れている時代なのです。

喜んでばかりはいられない

各 位

野 田 一 夫

本日は 7 月 4 日、再び渡米する機中で来週分のこの一文を記しています。成田へ向う直前まで読売新聞社主催の私大進学に関するパネルディスカッションに出席しておりましたが、司会者の永井順国氏が冒頭 500 人を越す来会者に対して私を紹介するに当り、「……たまたま今朝、朝日新聞の『天声人語』も大きくとりあげましたように、新設ながらなかなかユニークな教育方針で話題を呼んでいる多摩大学学長の野田さんです。……」といった発言をされたので、ちょっとびっくりしました。というのは、今日は早朝から多忙で、恥ずかしいことに朝刊も読んでいなかったからです。しかしその会合後、私の秘書が気をきかせてコピーしておいてくれた例の記事に接してみて、率直なところ、嬉しくも思いまた気が重くもありました。

「天声人語」が本学に関してとりあげてくれた「成績不良者への退学勧告」「年間講義案の作成」「無休講」の 3 点は、世間の常識からいえばいわば当たり前のことばかりです。本学はそれらを当然前提とした上で、大学として真にユニークな理想を実現しようと考えておりますのに、マスコミは今のところ、かんじんなその理想については余り関心をもってはくれません。それはそれとしても、実は成績不良者と会い、父兄と話してみると、やはり人情にほだされて、結局退学してもらったのは、12 名中たったの 2 名。500 ページに及ぶ今年度の「年間講義案」にしても、一読してみると、個々の出来不出来または力の入れ具合は歴然としている上に、各分野ごとの相互調整はやはり不十分といわざるをえません。休講はゼロといいながら、ある非常勤講師は昨年来代講の先生方に迷惑のかけどおして、結局先日、私の退職勧告を受け容れてもらった次第……。

となると、多摩大に対する世間の過大な評価の高まりに対し私はいま、喜んでばかりはいられない気がしています。

君は 坂の上に 雲を見るか
各 位

野 田 一 夫

発想とは不思議なものです。忽ち妙案が心に浮ぶこともありますが、何ヵ月も呻吟を重ねた末、突然いい考えが頭にひらめくこともあります。それだけにいい考えがひらめいた時の喜びはより一層大きいとはいいますが……。私にとっては、たとえば、“多摩大学”という名称はウソのように簡単に生まれましたが、今年のわが校のポスターの図柄は2ヵ月にわたる苦心の産物です。

本学の場合、学生募集用ポスターの図柄は学校案内書の表紙にも使いますから、毎年入学式が終るや否や関係者の間で企画が始まり、遅くとも夏休み前には完全にモノができていなければなりません。昨年、一昨年と違って今年は、専門業者の提出する図柄はどれもこれも気に入らず、結局私どもでコンセプトをきめることにしたのですが、ゴールデンウィークの頃から、私も中村学部長もあれこれと心を悩ましつづけたのです。

それが、去る6月11日の夜、出張中のシカゴのホテルのベッドの上で、私の心に天啓のようにある図柄、というより図柄をリードするフレーズ「君は 坂の上に 雲を見るか」が浮んだのです。「……深い木立を貫く一条の山道、彼方の青空に真白い積乱雲、峠が近づいた時突然視界が開けると、そこには息をのむほどに美しい山々、神々しいばかりに姿を変えた遠い雄大な雲をまぶしげに仰ぐ青年と少女……」

先日の学内会議で、嬉しいことに今年は私の案が採用されました。本当は“峠の彼方に……”なのですが、余りにもありきたりなので、敢て“坂の上に……”にしました。明治の青年、というよりは明治という時代そのものを描いた司馬遼太郎氏の有名な小説「坂の上の雲」に因んだわけではありませんが、結果的にはイメージが重なってかえって良いかも知れません。

この図柄の成功を、切に祈りたい気持です。

T I M I S の 壁

各 位

野 田 一 夫

いつも何かにつけて私のことに気を配ってくれる心優しい友人たちは、どうして感謝の気持を表現したらよいのでしょうか。そうした友人の一人藤田潔氏（株式会社ビデオプロモーション社長）から東欧旅行の土産だと『自由ベルリン贊歌』と題する画集が贈られてきました。「ベルリンの壁は完全にとり払われてしまうのか？ とすれば早く何とかして行ってみたい」という私の気持をまるで見抜いていたかのようなタイミングで…。

今や文字通り無用の長物と化してしまったベルリンの壁に各国の画家たちが思い思いの絵を描くために集まり、全長160kmを超す空前絶後の長大な野外ミュージアムが出現しつつある、という報道を年初にマスコミを通して知らされていましたが、私自身何という無知だったことか、ベルリンの壁の絵はすでに1960年代から現われ、東西関係の緊張度に応じて盛衰をくり返しながらも、また消されても消されても増えつづけ、すでに1987年には目抜きの場所では壁は絵で一杯になっていたそうです。

この画集は、1984年以来ベルリンの壁画を撮影しつづけている画家ヘルマン・ヴァルテンブルグが、いろいろな意味で傑作と信ずる100の作品を編集したもので、ページをめくるごとに私はひどく感動しました。一文にもならないこの画業を、時には逮捕の危険をもおかして、なぜかく多くの無名の才能ある人々が長年つづけてきたのか？ 自由へのあくなき希い！ コミュニケーションを求めてほどばしる熱情！……もしこれらが人間の共通の属性であるとすれば、一般に掲示板と称するものは何とも無愛想に感じられます。

学生が主張や不満や提案を絵や文章で好きな時に自由に表現できる場として、本学は学内に“TIMISの壁”（仮称）をつくってみたらどうか、などと考えさせられました。

再び「多摩大の敵は多摩大」

各 位

野 田 一 夫

今週火曜日の各紙朝刊は、大学審議会大学教育部会がその前日に発表した中間報告の内容を大々的に報道しました。日本の大学の設立ならびに運営を実にきびしく規制している大学設置基準は、恐らく近い将来、この報告書の内容である“自由化路線”に沿って大幅に改革される筈です。しかしだからといって、世間の常識に反する現行の大学の諸制度や慣習も自然に改善されていくと期待するのは禁物です。大学設置基準を大学にとっての“外的制約”と呼べば、既設の大学には（しかも歴史と伝統を誇る大学ほど根強く）、“内的制約”と呼べるもうもろの制度や慣習は居据っているからです。源を辿ればそれらは、現行の大学設置基準によって生れたことは事実ですが、ひとたび学内に根づいた制度や慣習は、外的制約条件の緩和などでは容易に変らぬしぶとさをもつて至っています。

多摩大学はもちろん現行の大学設置基準に基づいて認可され昨年開学されたわけです。しかし本学は時代の趨勢をしっかりと見通した上で、制度的に許されるワク内では目一杯の新規路線を自立的に確保して発足しました。したがって、建物・設備の在り方から経営・教育方針に至るあらゆる側面で本学の現状は、近い将来改革される大学設置基準の目ざすものと、実質的に何の相違もないと断言できます。いわば、目下多摩大学は時代を“先取り”していることは確実です。このところマスコミ各媒体が頻繁に本学のことをとりあげてくれる理由もそこにあります。しかし、気をゆるめてはなりません。開学後すでに1年余り、本学教職員や学生の間にもどこか“保守的”気風がただよい始めています。中村学部長が見事に喝破された通り、すでに「多摩大の敵は多摩大」となりつつあることを、われわれはこの時点でお互い肝に銘じようではありませんか。

われ思う、故にわれ在り

各 位

野 田 一 夫

イラクによる電撃的クウェート侵攻、そしてその強引な統合、こうした一連の行動に対して世界のほとんどの“国”がイラクならびにフセイン大統領に対して反感をつのらせています。先日の国連安全保障理事会での制裁決議に力を得て、少くとも日本のマスコミは反イラク反フセインの論調を毎日強め、世論もこの線に沿ってほぼ完全に形成されたかに見えます。

政府の重要な外交的決定をマスコミがこぞって支持し、興奮とも信念ともつかぬ感情に動かされた国民は一枚岩となってころがり、その結果は……。これまでの人生の中で何回も納得できない仕打ちを政府ならびにマスコミから受けた一日本人として、私は現在の中東情勢をつとめて冷静に見守っています。マスコミ、とくに外国のマスコミを注意深く検討したかぎり、イラク軍がクウェートから撤退し、ジャビル政権が復活しただけで事態が解決することにはならぬ筈です。なぜなら、ジャビル政権下の体制そのものに問題があったに違いないからです。

さて、先月末久方ぶりに香港経由で深圳を訪れて一驚しました。10年前わずか人口約2万だった田舎町は、今や人口120万の大都市へと変貌しています。一驚したのは人口の増加といった統計的事実のためではありません。群立する高層ビル、ショッピングセンターの店頭にあふれる商品、往々交う人々の潑刺とした顔つきと敏捷な動き……街全体のかもし出す自由な雰囲気と活力が、私を驚かせたのです。「（東欧に比べて）中国はコジなほど變っていない……」などと公言してはばかりないオピニオンリーダーは、一体何を知っているのでしょうか。

考るだけでなく行動する人間、頭だけでなく五感も働く人間、大勢に動ぜず所信を貫く人間、多摩大学はそういう人間をこそ育てたいものです。

上岡龍太郎の話芸

各 位

野 田 一 夫

『日経エンタテインメント』(89号)の特集「関西の才能」で“上岡龍太郎”をはじめて認識しました。今年に入ってよくテレビの画面上で見かける司会者の中で、服装といい態度といい珍らしく好感のもてるタレントだと意識していたのが、その上岡でした。巨泉といえば、あのわけ知り顔の太々しいニタニタ笑い。タモリといえば、何かテカテカヘラヘラネチネチした気色の悪さ。たけしといえば、年甲斐もなくツッパッタような下品な言動……。世に名を成した人間はみなそれなりの才能と努力のあらわれと敬意を表するのが私の信条ですが、好き嫌いは自ら別で、とくにいわゆる“ミーハー”向けのテレビ番組で大物司会者として名を成したタレントはほとんど、その強烈すぎる個性が私には“イヤミ”に思えてならなかつたのです。

彼らの人気もこのところかけりが目立ち、対照的に上岡の人気がうなぎ上りに高まっているようです。上記の特集では、上岡の人気の原因を“トーク番組”的全盛に象徴される「テレビのラジオ化」に求めています。つまり、テレビへの接し方が積極的に視聴する番組中心からつけ放して何となく視聴する番組中心へと移ろうにつれて、タレントには強烈な個性よりはイヤミのない人柄と、そして何よりもすぐれて耳に快い語り口が要求されてくるわけです。上岡龍太郎は、関西では何と60年代から若くして漫才師として名を成しながら早々と挫折し、長い雌伏の期間に人間的成长をとげるとともに、ラジオ番組で大いに“話芸”を磨いたとのこと。たしかに彼の成功も、人柄はもとより服装や態度だけでは無理だったと納得しながら、この“話芸”に当るものは、タレント以外の多くの職業で成功するためにも基本条件たりうるのではないかと、現在の大学教育の在り方をつくづく反省しました。

ブリスベンで考えること
各 位

野 田 一 夫

大好きなブリスベンにいます。ワイフと老後を暮そうと家まで買い求めてあるこの地ですが、まだ現役の身では度々来るのも思うにまかせず、東京にいて日頃憧れががつのるせいか、着いた日は空港が、街が、ましてや家の周辺の景色が私の胸を懐しさで一杯にする程です。

日本と逆で、オーストラリアの春はどの都市よりも早くこのブリスベンにやってきます。昼間の気温は24～25度、そよ風が頬を撫でる快適な季節に入りました。早朝空が白み始めてから日輪が真赤に西空を染めて沈んでいくまで、一日はいつものように大陸的テンポで万事ゆっくり過ぎていきます。残された人生を考えると、私のようにとくに性急な人間には、この生活のテンポこそ、ブリスベンで暮す最大のメリットです。

短い今回の滞在の間にクリフィス大学の副学長カーニー教授からお招きを受けました。来年2月多摩大学の学生約30人がこの大学で夏期セミナーを受けることになっています。この大学は①歴史が新しく、規模が大きくなないこと、②日本語および日本研究を最重視していること、③主要コースの中に経営と情報を含むとともに“ホテル・レストラン”コースの新設計画のあること、④“実学”と“国際性”を教学の基本方針にしていること等々で、本学に親近性があります。

そこで「将来は学生のみならず教授間での交流も進めたらどうか」という提案をしたところ、副学長は早速昼食の席に関係部門の責任者6名を呼び集め、おかげで話は最初から和やかになりますに具体論に入れました。組織が官僚化していない若い大学だからこそできるわけだと、すっかりクリフィスの印象を良くしました。それにしても、私にとって仕事のテンポだけは、やはり余り“大陸的”でない方が性に合うようです。(8月17日記)

天城会議

各 位

野 田 一 夫

先週末は2日間、日本アイビーエムの天城ホームステッドで開催された「天城会議」に出席してきました。官・財・学・マスコミ等各界の第一線で活躍する人々が、それぞれの“商売上の立場”を暫し忘れ、現下の課題についていろいろな角度から徹底的に語り合うのが、会議の目的です。今年の課題は「これからの10年-2000年の世界と日本」です。

天城会議は今年で21回を迎ますが、想い起すと、最初の頃は趣旨が漠然としていたせいか、なかなか主催者の意中の人人がおいそれと出席を承諾してくれず、関係者は説得に毎年苦労を重ねました。それがどうでしょう。この会議の評価が早々と確立して以来、出席希望者は年ごとに増えるとともに、“常連”的の出席率も高まったために、関係者は今や、せいぜい50名前後の出席者の選定に毎年頭を悩ませている始末です。

ある催しとか組織が一定の社会的評価を確立するためには、通常、相当期間地道に活動をつづけることが必要です。もともと活動内容の程度が高くても、催しとか組織はそれらが新しく知名度がないというそれだけの理由で社会的評価が得られず、活動上にいろいろと支障を来します。ただし、社会的評価が高まることが活動内容の向上を示しているかといえば、皮肉なことに、そうでないことの方が多いのです。いわゆる“マンネリ化”とか“伝統の上にあぐら”という状態に陥るわけです。

私のみるとところ、天城会議も一度マンネリ化しかかりましたが、それを自覚した関係者の努力でこの数年会議内容はとみに輝きをとり戻しました。多摩大学は新生ながらこのところ幸い知名度だけは俄然高まりました。しかし、私共はあくまで所期の目的に沿って地道な教育活動の実績をつみ重ね、高等教育機関として、社会的評価にふさわしい内実を具備しつづけたいものです。

コミュニティカレッジ発足

各 位

野 田 一 夫

「市民への大学の開放」というよりは「市民を対象とした大学の形成」こそは、本学設立以来の基本方針のひとつです。来年以降本格的に実施を予定しているエクステンション・コースに先立ち、その試金石として、本学は来る10月13日(土)午後、第1回「コミュニティカレッジ」を以下のように開催いたします。

12:30～12:45 ご挨拶およびスケジュール説明

- ・門馬 晋「手紙文化論」・尾高敏樹「これから ホーム・ワーカステーション」(実習を含む)
- ・楠 光雄「学校で聞けない音楽論」・近藤隆雄「21世紀の家族関係一家族は消滅するか」

14:25～15:35 総合講座(司会 河野顕／各講座講師出席)

15:45～16:45 特別講座 日下公人「世界は会議の季節」

16:55～17:55 懇親パーティー

「新しい市民文化の創造」というサブタイトルに示されるように、本学のコミュニティカレッジの目ざすところは、受講者が、単に講座単位の教養とか個人的趣味や稽古事のレベルの知識・技能を修得するだけではなく、講座への参加を通して仲間意識を高め、それを基盤にして「コミュニティづくり」とか「コミュニティ同士の交流」、更には「国際的な人間ネットワークの形成」といった活動を展開することです。

そのため、今回の単発セミナーにおいても、その内容と運営方式には工夫をこらしたつもりです。たとえば、個々の受講者は、まず同時刻に開講される4講座のどれかを選択するわけですが、その後総合講座において他の講座の内容をも知りうるとともに、特別講座や懇親パーティーへの参加を含めて、全受講者との交流を深めることができます。さらに、受講者は自動的に本学のコミュニティカレッジの会員となり、いろいろな形でその企画・運営にも積極的に参加して頂くことも期待しています。

青年よ大志を抱け
各 位 野 田 一 夫

ものの見方としての楽観論と悲観論には一長一短があり、何れも極端に走れば事の失敗の原因となります。しかし、古今東西を通じ、難事と取組んでそれを見事に成功させた人間は、例外なく基本的に樂観論者でした。したがって、前途ある青年を、教師は常に樂観論者に導いていく責務があると信じています。

先日、有志学生諸君より本学学内誌の巻頭言をたのまれたときも、私の筆は自然に走って、次のような一文となりました。

今年の多摩大学の案内書の表紙の図柄は好きだ。遠景の紺青の空と蒼くたおやかな峰々と、そして白く逞しい積乱雲……。それらを澄んだ瞳でくい入るように眺める少年と少女、この2人の表情と姿がかもしだす何とも言えない清潔感こそ、近景だ。中間には、陽光を浴びてページに輝く一条の坂道、針葉樹林の濃い緑と高原の草むらのあざやかな緑を見事にひきたたせる一条の坂道……。

この絵には希望がある。いや希望を達成しようとする強い意志がある。それも、権力者のように人を威圧するような意志ではなく、人をおのずから感動せしめるような、静かで毅然とした意志だ。そうだ！　このような意志こそ、健康な社会で生きる若者には自然に備わった人間的資質なのだ。不幸なことにいま、社会は健康とはいえない。しかし一群の青年の心にこのような意志が宿るかぎり、社会は必ず健康を取り戻すことだろう。

“21世紀を拓く”といった理想を掲げて多摩大学を創ったわれわれは、それこそ神に祈るような気持で、本学1・2期生の学生一人一人の心に問いたい。「君は、君の人生の坂の彼方に、あの様に輝かしい雲を見る能够があるのか」と。